

## 巻頭言 「よき力」

宇野 元

1945年4月9日、ドイツが連合国に破れ、ヨーロッパでの戦いが終わるわずか一月前、ディートリヒ・ボンヘッフアーはナチスによって処刑されました。将来を嘱望された、大きな賜物ある彼の将来の仕事は中断し、もし生きていたら、私たちが読むことができたろう著作は、世に現れることなく失われてしまいました。ところが、戦後数年を経て、親友の手によって、おびただしい彼の手紙が出版されました（『抵抗と服従——獄中からの手紙と手記』）。

この書簡集は、現在も多くの国で読まれています。カール・バルトの『ロマ書』や『教会教義学』とともに、時をこえて読まれている20世紀の神学書に数えられるでしょう。手紙と手記というジャンルの特色からもうかがわれることですが、この本をひらくと、著者の生活とじかに結ばれた、豊かな洞察に出会います。自ら囚われの身になりながら、同じ苦難の中にある人々を励まし、元気付けた、彼の人となり浮かび、閉ざされた状況の中でもくじけない、強い精神に触れます。

彼はフィアンセに伝えます。ぼくは孤独を感じていないと。親しい人々が、いつも共にあるのを感じていると。困難な状況の中にあるが、ともに捧げる祈りがあり、互いへの心配りがあり、ともに心にとめる聖書の言葉がある。また音楽や、本や、懐かしい会話の記憶がある。これらのことによって、今まで味わったことのないような励ましを与えられていると。

目には見えないが、見えるものにまさる現実があたえられている。ともに生きる人々の存在がある。私たちも困難な状況の中で、今まで以上にこの現実を感じとるセンスが与えられているでしょう。そして私たち自身の傍らに、また近くの人たち、遠くの人々の傍らに、神がいてくださいます。このひそかな、けれども確かな現実に関心をひらくときです。

よき力に 驚嘆すべき仕方で守られている  
安心して将来に思いを向けよう  
神が傍らにおられます 夕べも 朝も  
確固不動に どの新しい日にも